貨幣の世界――3

形 その2 古代から近世の東アジア 後編

前回は中国の春秋戦国時代までの貨幣の形についてご紹介しました。今回はその後の歴史を追いながら、中国をはじめとする東アジアの貨幣の形をみていきたいと思います。

永遠の円形方孔（えんけいほうこう）

紀元前二二一年、秦が中国を統一すると、秦の採用していた円形に四角い穴の貨幣「半両銭」（写真1）――秦が滅ぼした魏（ぎ）の貨幣に由来するとも言われます――が、その後二千年間の長きにわたる中国および東アジアの貨幣の形の原型となりました。

この形については、中国人が「天は丸く、地は四角い」と信じていたことに由来するという説があります。

秦の後に建てられた前漢（紀元前二〇二～紀元後八年）において、その領土を最大にした第七代皇帝武帝（在位

中　国

写真１　半両銭

両は重さの単位で、半両＝約８ｇでした。実は、半両銭の重量は、半両未満のものが多かったようです。

写真２　五銖銭

銖は重さの単位で、24銖＝１両でした。

写真３　開元通宝

表　裏

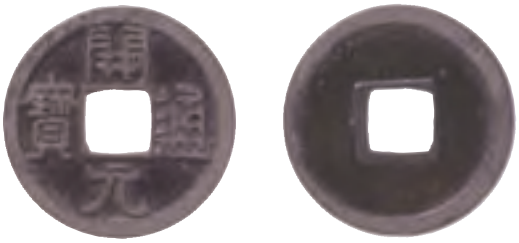

写真５　永楽通宝

明第３代皇帝永楽帝（在位1402～1424年）の時代に鋳造され、室町時代、日明貿易を通じて大量に日本にもたらされたと言われています。ちなみに、戦国武将織田信長の旗印にも使われていました。

写真４　北宋の銅銭　熙寧元宝（きねいげんぽう）

北宋第６代皇帝神宗（しんそう）（在位1067～1085年）の時代に発行された銅銭です。12世紀以降、日本に大量に輸入された銅銭の一つです。

（写真１～５提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

紀元前一四一～紀元前八七年）の時代、五銖銭（写真2）が発行されました。この貨幣は、後漢、魏晋南北朝、隋と、中国で広く長く受容されました。

そして唐（六一八～九〇七年）の初代皇帝李淵（在位六一八～六二六年）の時代、円形方孔の銭「開元通宝」（写真3）が登場しました。世界帝国である唐の圧倒的な影響の下、日本をはじめとする周辺諸国は、この「開元通宝」にならって銅銭を鋳造しました。そして、以後約千三百年の長きにわたり、「開元通宝」が、中国および周辺諸国の銅銭の規範となりました（写真4～9）。

近代に入ると、洋の東西を問わず、貨幣はおおむね円形（円盤）となります。ただ、中には、日本では見慣れない形の貨幣を日常的に使用する国や地域もあります。また、記念貨幣や収集家向け貨幣の場合、その形は極めて多様です。

次回は、近代以降のさまざまな形の貨幣をご紹介していきたいと思います。

その他のアジア諸国

写真９　朝鮮王朝、ベトナム（黎朝）の貨幣

左／朝鮮通宝は、朝鮮王朝（1392～1910年）の第４代国王世宗（在位1418～1450年）の代に、唐の開元通宝に倣って鋳造された銅銭です。ちなみに、世宗は、ハングル（訓正民音）を制定した国王です。
右／洪徳通宝は、大越国（ベトナム）黎朝（後黎朝ともいわれる。1428～1527年、1533～1789年）の第５代皇帝聖宗（在位1460～1497年）によって、洪徳年間（1470～1497年）に鋳造された銅銭です。

（写真７～９提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

日　本

写真７　和同開珎（708年発行）

写真６　富本銭

天武天皇の時代（680年代）に、日本で最初に発行された銅銭です。詳細は、本誌2015年春号の「お金の源　第１回　銅貨」をご覧ください。

（提供：奈良文化財研究所）

写真８　寛永通宝

表　　裏

平安時代の銅銭製造中止以来、初めて日本の統治者によって製造された銅銭です。寛永年間（1624～1645年）以降も製造されましたが、年号は一貫して「寛永」が使い続けられました。

「新」の王莽の復古政策

前漢と後漢の間、わずか15年で滅びた「新」（8～23年）。漢室の外戚となった王莽が、中国史上初めて禅譲（帝王がその位を世襲せずに有徳者に譲ること）を受けて――実質は帝位を奪い取って――建てた国です。新は、その国名に似合わず儒教に基づく復古主義的政策を採用し、孔子の生きた春秋時代さながらに、円貨と刀貨とを合わせた不思議な形の貨幣を発行し、また、五銖銭の使用を禁止しました。しかし、新の貨幣は人々に受け入れられず、他の復古主義的政策と相まって経済・社会が混乱する中、新は王莽一代で滅びました。

新の貨幣（契刀）
（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）